目次

◆ 生い立ちについて　～貧しかった幼少期～ 7

◆ 父について　～60 年後にわかった愛～ 8

◆ 母について　～苦難の中を生き抜いた母～ 11

◆ 小学生、中学生のころの思い出　～読書と音楽が好きで～ . . 14

◆ 近所でも評判のいい子　～周りの人々に支えられて～ 17

◆ 就職　～ハーモニカ調律、ヤマハからの引き抜き～ 20

◆ 初恋　～身分違いの悲しさ～ 23

◆ エスペラントという選択　～世界への扉、出会いの扉～ 26

◆ 入信　～強引に誘われて～ 28

◆ 結婚　～浜松から名古屋へ～ 34

◆ インマヌエル教会からの離脱　～自由を求めて～ 37

◆ 鳴海から豊明へ　～新しい地、約束の地～ 40

◆ 子育てのこと　～夫婦の対等な関係がカギ～ 42

◆ 信仰の葛藤　～神様とつながり続ける、教会にとどまり続ける～ 45

◆ ジーベさんに会いに行く　～エスペラントの翼で世界へ～ . . 49

◆ 信じて生きる祝福　～貧乏も宝物に～ 55

◆ 最後に　～家族や周りの人たちに伝えておきたいこと～ 58

◆ 生い立ちについて　～貧しかった幼少期～

私は静岡県の浜松の浅田町（現在の浜松市中区）っていうところで生まれたの。歩いて行こうと思えば海まで１時間ぐらいで行けるようなところ。元旦の日には朝まだ薄暗いうちからみんな起きて、走って近くの海岸（中田島海岸）まで行ったの。そうするとその途中にたき火をして待っててくれるおじさんがいたのをよく覚えてる。

私が生まれたのは昭和 16 年（1941 年）の１月４日。私が５歳のとき、戦争の終った次の年（昭和 21 年）にお父さんが病気で死んだの。そのとき弟が４歳、妹は生まれて１か月の赤ちゃんだった。姉が２人いるんだけど、１番上の姉は昭和８年生まれだから８つ上、すぐ上の姉さんは３つか４つ上。

私の父はそこそこにお金を残してくれたんだけど、戦後のインフレでお金の価値が 10 分の１ぐらいになっちゃって、そのお金はすぐになくなっちゃった。それで母方のおばあちゃんの家からいろいろ援助してもらってたのよ。おばあちゃんの家は私たちの住んでいた浅田から舘山寺（現在浜松市西区）へ行く途中の伊佐見村（現在同西区）っていうところだったんだけど、おじさんが１か月に１回、そこから荷車を引いて来て、野菜やなんかをたくさん運んできてくれたの。その代わり、お百姓してたもんだからお便所のくみ取りをして帰ったの。

母も、妹が３歳ぐらいなったら働きに出るようになった。妹は今でいう保育園（当時は託児所っていったんだけど）に預けて、私はその妹の送り迎えや子守りをしたりしてたよ、母は残業したりもしたからね。姉たちが御飯の支度してくれたりした。そうやって何とか生きていたんだけど、とにかくすごく貧乏でね。姉２人は私が中学生になったころには紡績工場へ働きに出てたの、住み

込みで。姉たちが外で働いて給料を入れてくれたから、私たち下の 3 人が育ってこれたのね。

姉たちが家を出てから、食事の支度も自分たちでしなきゃいけなくなった。今みたいにガスや水道があったわけじゃないから、まず井戸水を汲んで流し台まで運ぶの。それは弟の仕事だったんだけどね。台所も土間だったんだよ。それでそこにおくどが置いてあって、七輪が置いてあって、薪でご飯を炊いてた。どんなものを作ってた」のか全然覚えてないけど、まあ大したものは作れなかったね。肉とか刺し身とか卵とか、そんなものは結婚するまで食べたことなかったね、せいぜい干物の魚ぐらいかな。とにかく貧乏だったの、明日食べるものもないっていう貧乏。今の時代は冷蔵庫を開ければ何でも入ってるでしょ、それが当たり前。でも当時、私の家にはお米もなかった。ほんとに何もない家だったね。今になって兄弟がみんなで集まるとよくそういう話しになるの、よくあんな生活ができたねって。私が育ったのは戦後すぐだからどの家もそれなりには貧しかったと思うけど、うちは父親がいなかったから余計に貧乏だったのね。

貧乏はしたけれども、兄弟はみんな仲が良かったし今でも仲がいいのよ。5 年に 1 回ぐらいかな、兄弟会っていうのをやるんだけど、みんなほんとに仲が良くてね。1 番上の姉はもう 82 歳。自分で生活するのは難しくなって老人ホームに入ったよ。

◆ 父について　～60 年後にわかった愛～

父の実家は金持だったの、浜松の曳馬（ひくま）っていうところだった。結婚して新家（しんや）に出るときに財産を分けてもらったんだけど、何か事業に失敗したらしくて。

2011 年の兄弟会にて

実は 1 番上の姉は前の奥さんの子どもなの。でもその奥さんの実家は「事業に失敗したような家にはうちの娘はおいておけない」って言ってその人を連れ戻しちゃったのよ、娘を残してね。離婚って言っても死別じゃないの。だからうちの母は子連れのところへお嫁に来たということなのよ。2 番目の姉から私、弟、妹は同じ母なんだけど、そういうわけで一番上の姉は違うの。

だから 1 番上の姉は加藤家の本家（父の実家）に行くとすごくかわいがられるわけ、まま母に育てられたかわいそうな子だって言って。私の母はすごく優しい人だったから一番上の姉ももちろん大事にしたんだけど、だけどやっぱり本家から見ると「涼子（すずこ）は働かされてお給料を取り上げられて不憫（ふびん）だ、不憫だ」って見えるわけ。それに姉もかわいがられればうれしいから、加藤の本家へはよく行ったの。私も何回か連れていってもらったことがあるんだけど、私の前で私の母のこと悪く言うわけよ。私は怒っちゃってね。「うちの母ちゃんは優し

くてお姉ちゃんをいじめたことなんか一度もないのに！」ってむこうのおばさんに食ってかかったらしいの、自分ではそんなこと覚えてないんだけど。それで姉に「シマ子は連れて行かない」って言われちゃったの。

だから父が亡くなってうちがどんだけ貧乏しても、父親の本家の援助はなかったの。母の実家の援助で生きてきたわけ。だけど一番上の姉がわりといい家にお嫁に行くことになったの。そうしたら「貧乏で満足な用意もできないだろう」ということで、本家の方がお嫁入りの支度や道具のお金を出したの。母は「貧しくてもうちからお嫁に出してやりたかったのに」って言って悲しんでたよ。

私の一番初めの記憶は、父のお葬式のときのことなの、5歳のとき。あの当時はまだ土葬だったんだね。私がはっきり覚えているのは棺桶の中に入っている父を私たちみんながぐるっと囲んでいたっていう光景。うちの前に大きな川が流れてたんだけど、近所の人がみんなで父の棺桶をかついで川の土手をずっと歩いて墓場まで行くの。墓場につくともう穴が掘ってあって、そこへ棺桶おろして。それから私たちが順番に砂をぽんとまいて、そしてみんなでバッと埋めたの。

あれは戦争が終わってから1年後のことだったでしょ、「お乞食（こじき）さん」って言って乞食の人たちが多かったの。お乞食さんは葬式の行列が立ち去るのを待ってて、みんながいなくなってからお墓のお供え物を食べるの。それを追い払うおじさんたちもいるんだけど、結局しばらくたつと戻って来ちゃう。その人たちにとってはそれが生きる糧だったのよね。それが私の一番小さいときのはっきりした記憶だね。

それより前のことは記憶がないね。だから生きてる父の姿って全然覚えてない。ただあとから誰かに聞いた話を覚えててね。上の2人が女の子だったで

しょう。3 番目の子どもっていうことで父から見れば「今度こそ男の子」っていう期待があったみたい。昔のことだからやっぱり跡取りが欲しいと思ったみたい。でも生まれてきたらやっぱり女の子だった、だから私には見向きもしなかったっていうの。誰が話してくれたか覚えてないけど、「私はお父さんに愛されてなかったんだ」っていうのが子ども心にすごく記憶に残ってるの。どこかに連れてってもらったという記憶も何にもないしね。

でも、何年か前に兄弟みんなが集まったときに 1 番上の姉が言ってくれたのよ。「シマ子、あんたはそんなこと言うけど本当はそうじゃなかったのよ。あんたを連れて歩くとみんながかわいいね、とか、かしこい子だね、とか言われるからお父さんはあんたを自慢にしてたのよ。だからお父さんはあんたをあちこち連れて回ってたんだよ、あんたはお父さんによくかわいがられたんだよ」って。それまで 60 年間「私はお父さんに愛されなかった子どもだった」ってずっと思ってきたの。でも姉がそういう話しをしてくれて「あぁ、そうだったんだ」と思ったよ。私も愛されていたっていうことがわかってうれしかったよ。

◆ 母について　～苦難の中を生き抜いた母～

母の実家は 3 人兄弟だったんだけど、弟 2 人はお父さんが違ってたの。母が生まれた後で新しい父親が来たんだけど、その新しい父親は「自分の子じゃないから」といって私の母をいじめたんだって。そんな家にいるのが嫌で、大人になって家出して京都へ行って、その義理の父親が亡くなるまで西陣織の工場で住み込みで仕事をしてたんだって。義理の父親が亡くなったということで浜松に帰って来たの。あの当時の女性はみんな 20 歳になる前に結婚してるで